

2019年度11月 実施 デュアルランゲージ・ディプロマ・プログラムに関するアンケート調査結果

* 実際のアンケート調査用紙は別紙をご覧ください



【目的】

国際バカロレア機構と文部科学省は、日本におけるIBの普及に向け「デュアルランゲージ・ディプロマ・プログラム(以下、「日本語DP」)」プロジェクトを共同で実施している。日本語DPでは、6科目のうち最大4科目まで、日本語で履修することが可能である(2科目以上は英語で履修)。

この日本語DPについて状況を把握し、今後の国際バカロレア推進に活用するためにアンケート調査を実施した。

調査の実施について

【調査実施主体】

文部科学省IB教育推進コンソーシアム事務局(委託先:アオバジャパンインターナショナルスクール)

【調査対象】

学校教育法第一条(以下「一条校」)に定める学校で、かつ国際バカロレア・ディプロマ・プログラムの認定を受けている32校(以下「認定校」)

【調査時期】

2019年11月12日～2020年1月31日

【調査方法】

質問紙調査(回答方法:メール、FAX、郵送、電話またはWebによる回答)

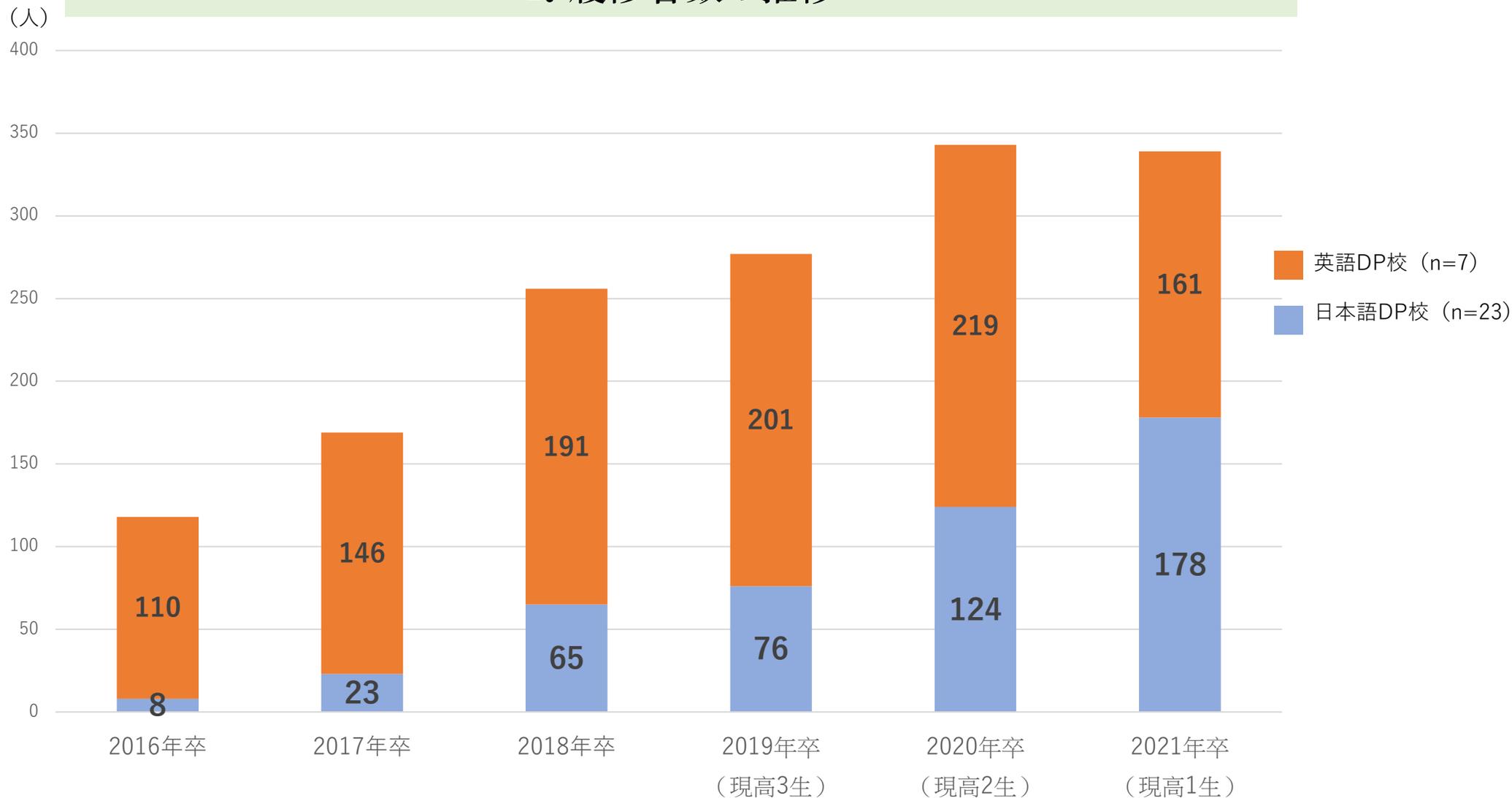
【有効回答数(率)】

30校(93%) (うち、英語DP校:7校(78%)、日本語DP校:23校(100%))

【調査不能数】

2校(うち、英語DP校:2校、日本語DP校:0校)

1. 履修者数の推移



※1 2018年までは実績、それ以降は見込みを回答

※2 2021年卒の学生数は未定と回答した学校が4校ある（うち日本語DP校3校、英語DP校1校）

1条校における日本語DPの人数の伸びは大きく、年々増加傾向にある

2-1. 日本語DP校におけるIB科目開講状況(グループ3~6)

※2019年度卒業生（現高3生）向けに開講している科目を対象に調査。よって、現高3生が在籍しない学校は本項目の有効回答数に含めない。
※日英両言語で開講している授業がある学校が存在するため、開講数の合計は、本調査項目における有効回答数を上回る。

(開講数)

12

10

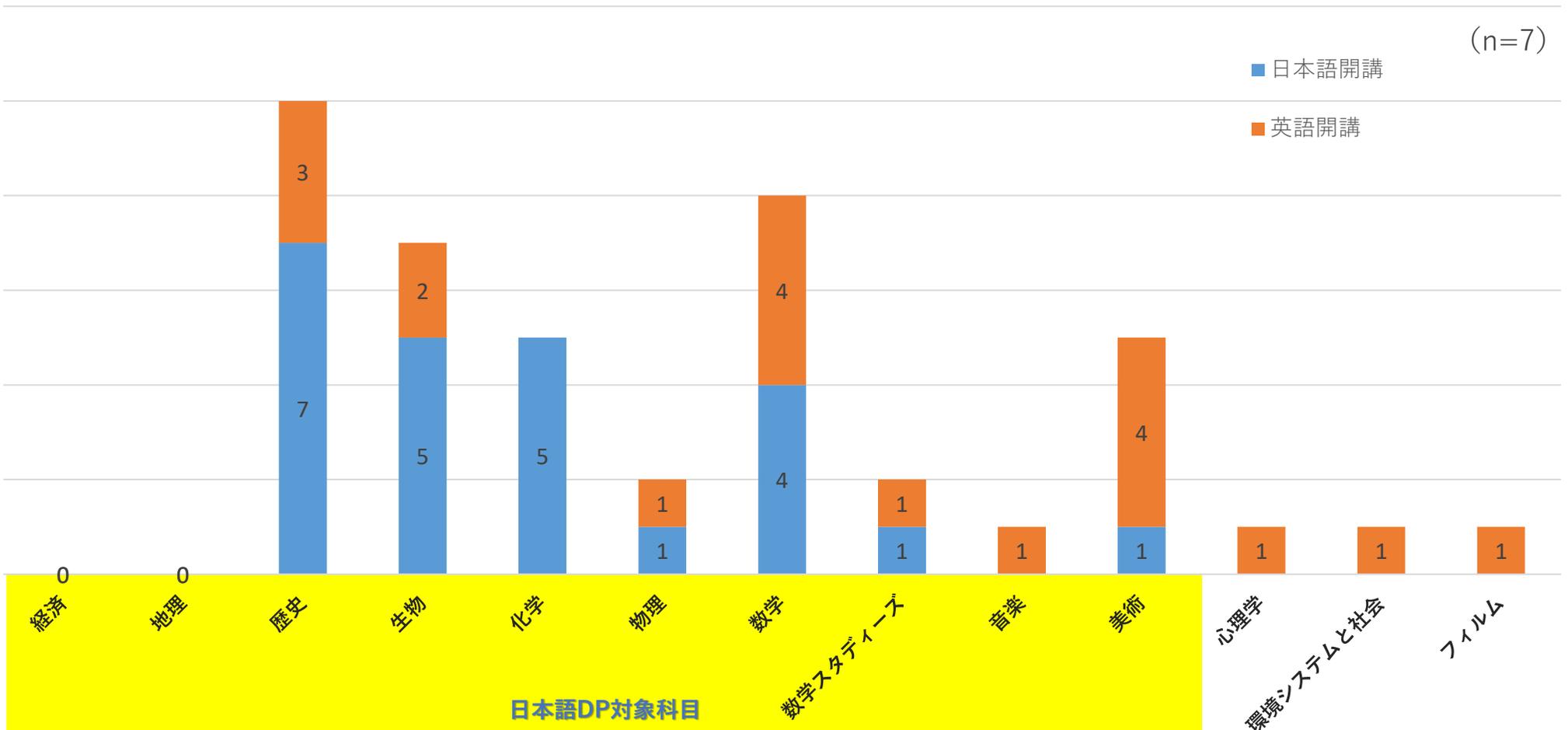
8

6

4

2

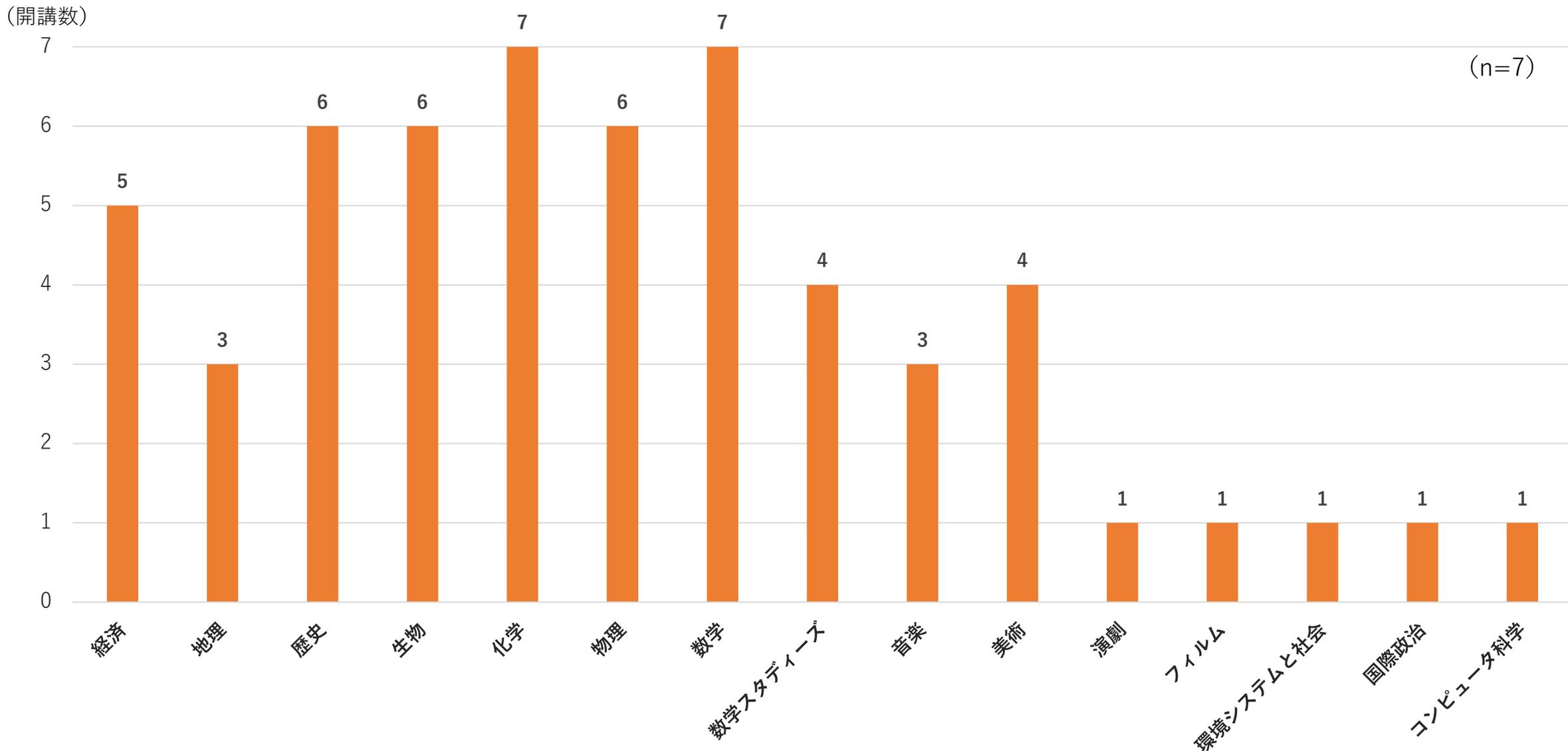
0



経済・地理・音楽は、日本語DP対象科目であるが、2019年現在、日本語での授業は開講されていない。

2-1. 英語DP校におけるIB科目開講状況(グループ3~6)

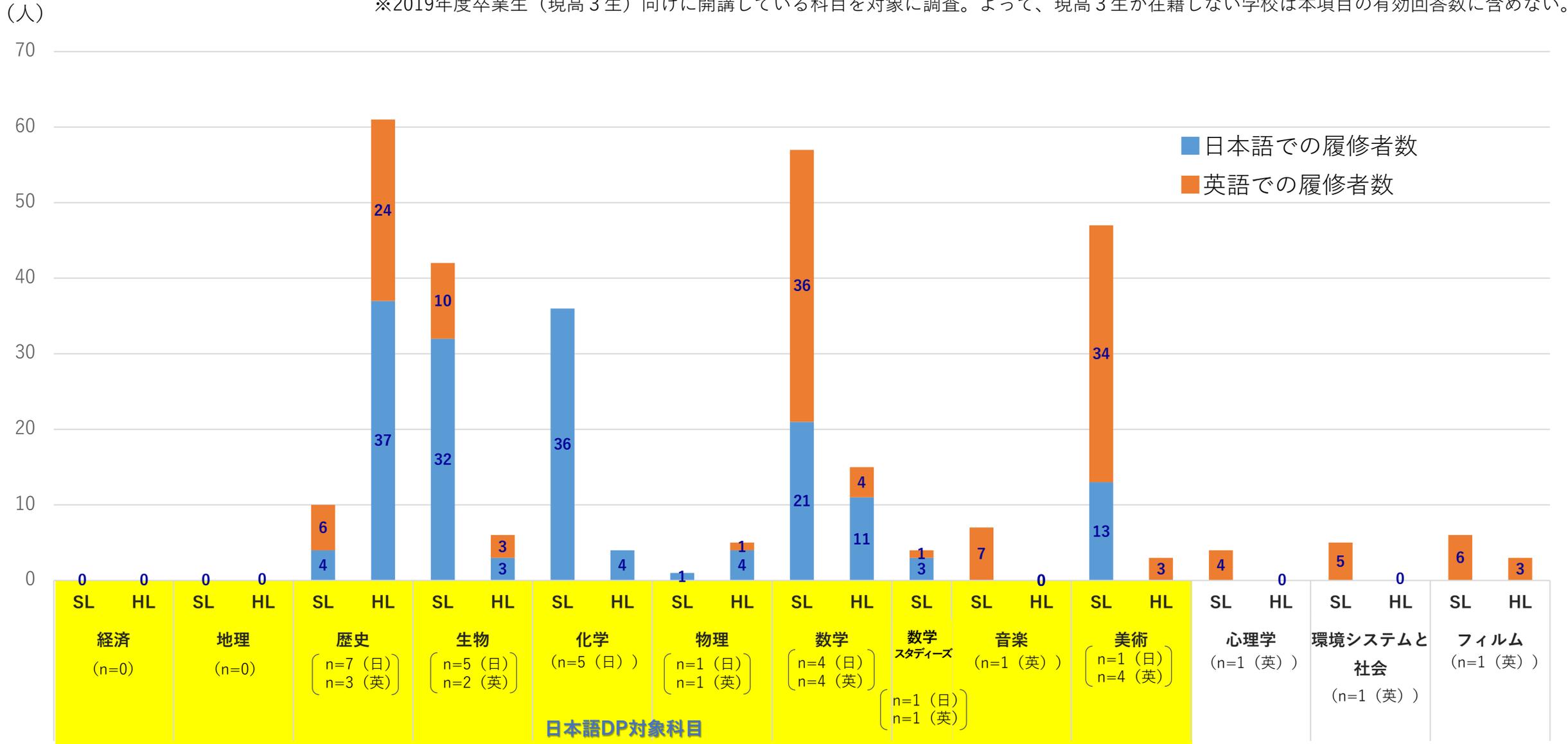
※2019年度卒業生(現高3生)向けに開講している科目を対象に調査。よって、現高3生が在籍しない学校は本項目の有効回答数に含めない。



英語DP校においては、日本語DP校に比較して科目による開講数の偏りは少ない。

3-1. 日本語DP校の科目別履修者数（グループ3～6）

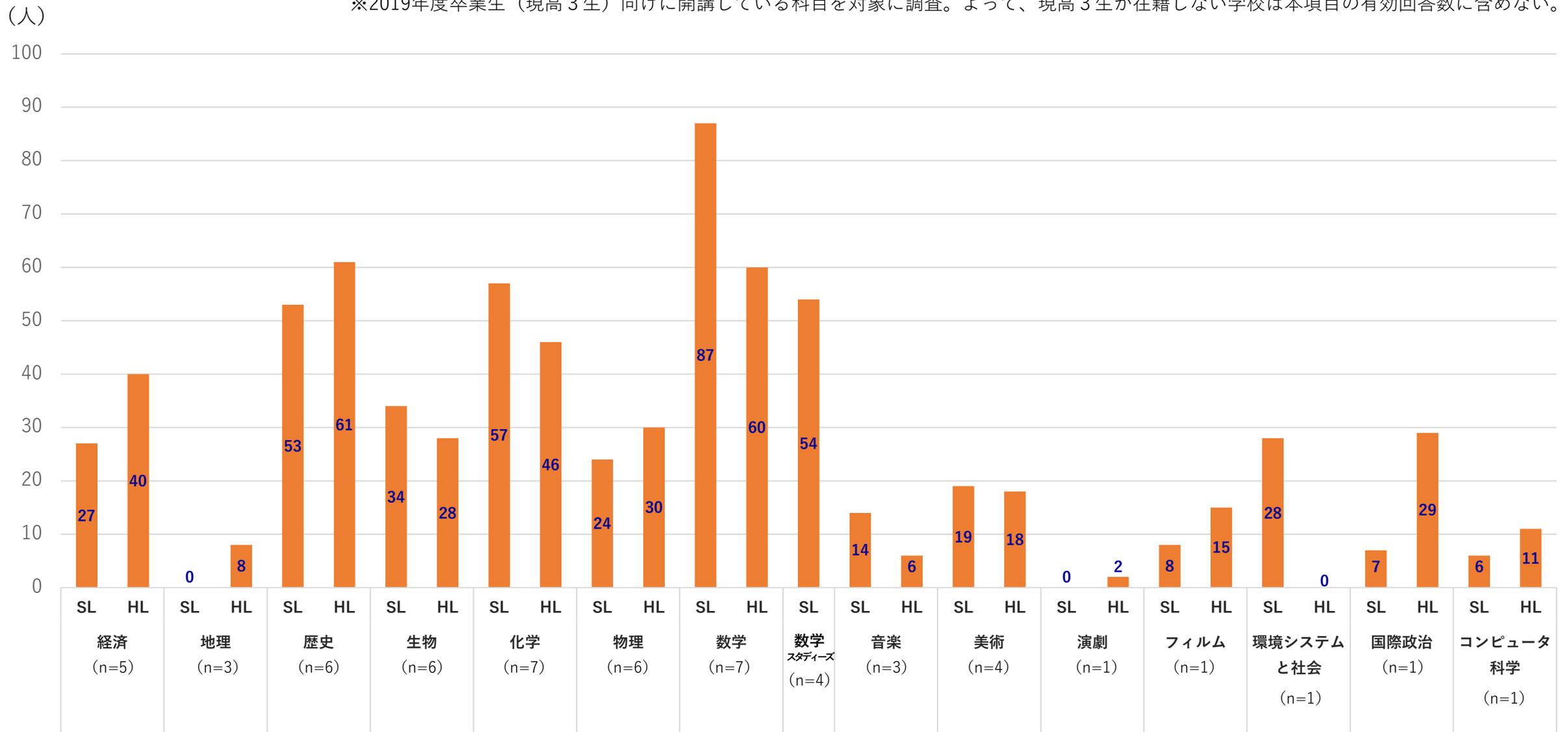
※2019年度卒業生（現高3生）向けに開講している科目を対象に調査。よって、現高3生が在籍しない学校は本項目の有効回答数に含めない。



日本語DP校における英語での履修科目として、グループ4の科目を選ぶ者が少ない。

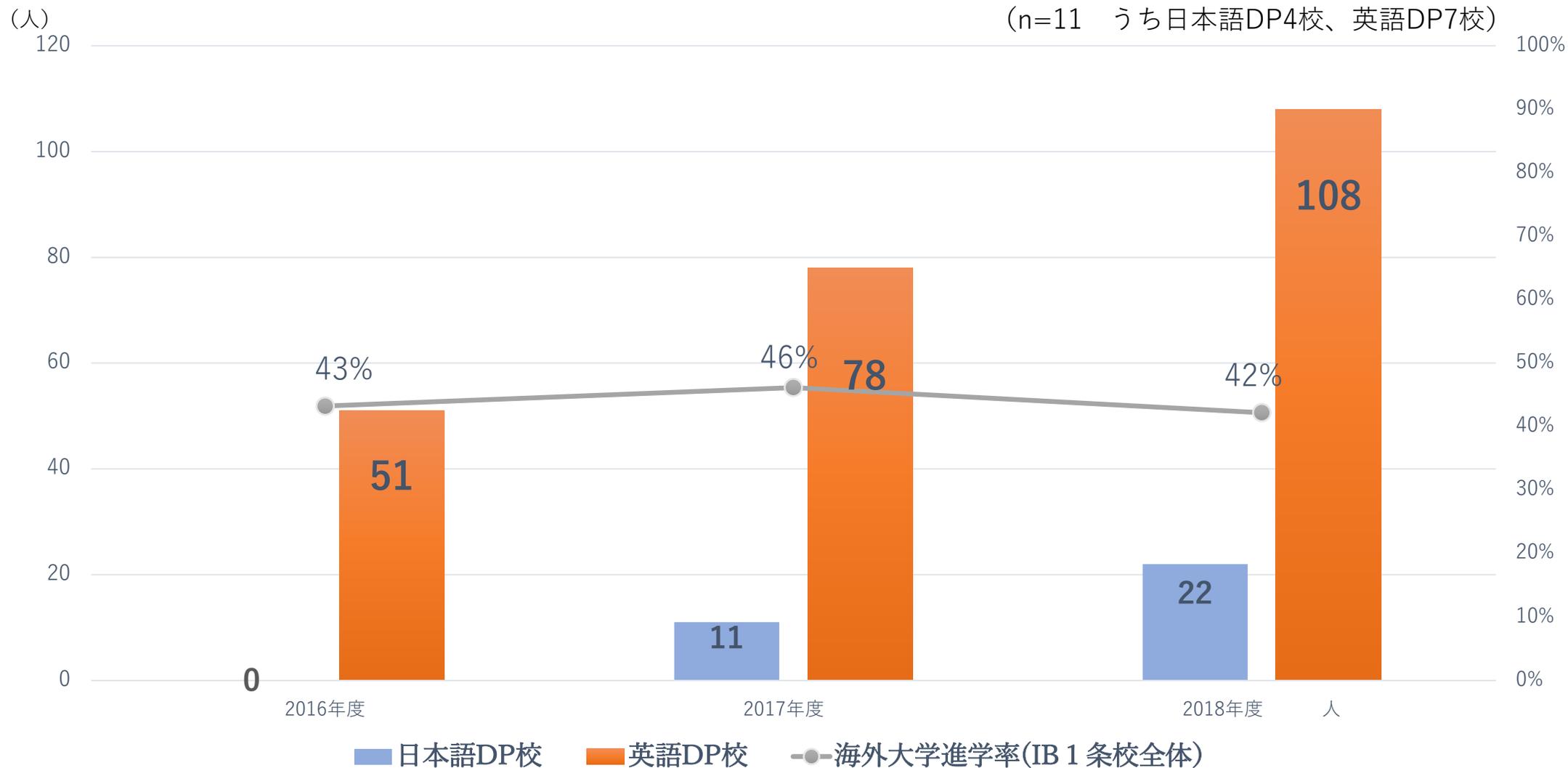
3-2. 英語DP校の科目別履修者数（グループ3～6）

※2019年度卒業生（現高3生）向けに開講している科目を対象に調査。よって、現高3生が在籍しない学校は本項目の有効回答数に含めない。



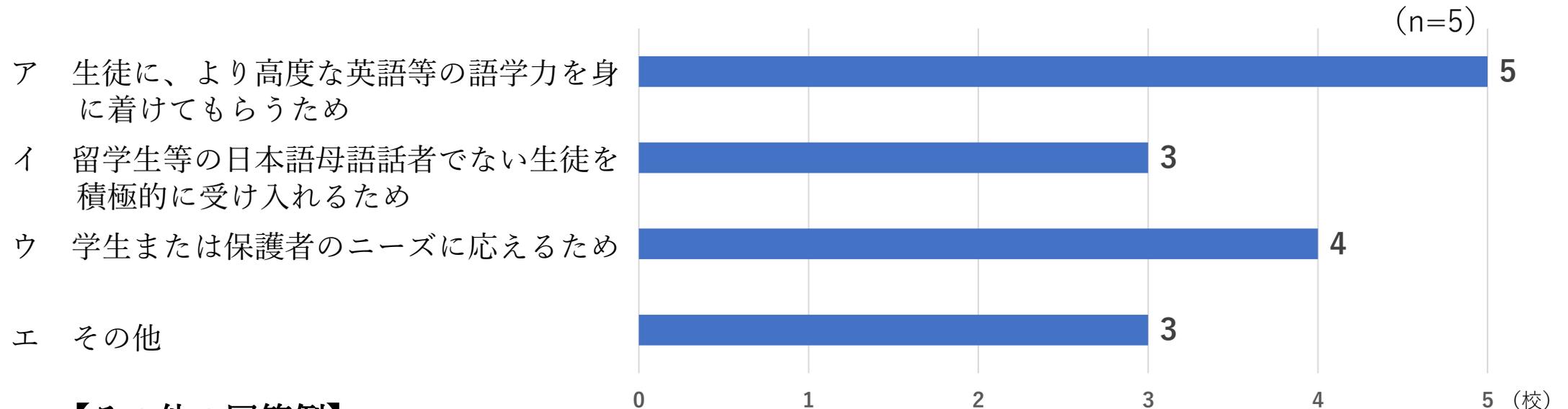
英語DP校では、日本語DP校に比べ、科目による履修者数の偏りが少ない。

4. 海外大学進学者数および進学率の推移(2016年度～2018年度)



海外大学等への進学率は4割台で推移している。また、海外進学者数は堅調に伸びている。

5-1. 英語DPを実施している理由について【複数回答制】

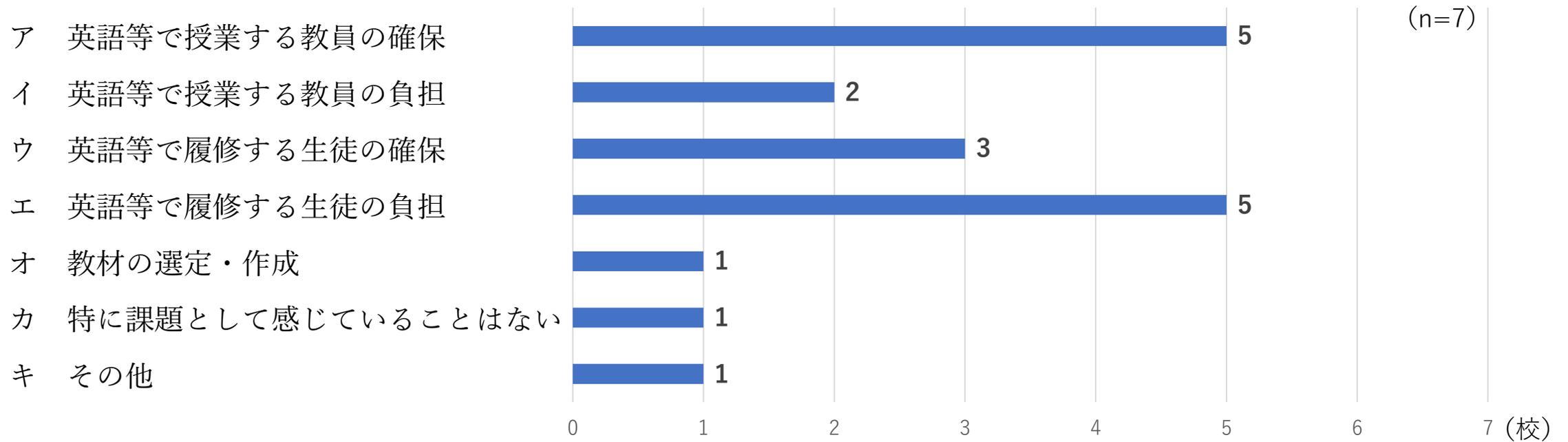


【その他の回答例】

- 英語イマージョン校としてスタートしたため
- 海外大学への進学を促すため
- 設立当初は、日本語DPは始まっていなかったため

英語DPは、生徒の英語力を伸ばすことが最も大きな実施目的となっている。

5-2. 英語DP実施校における課題について【複数回答制】

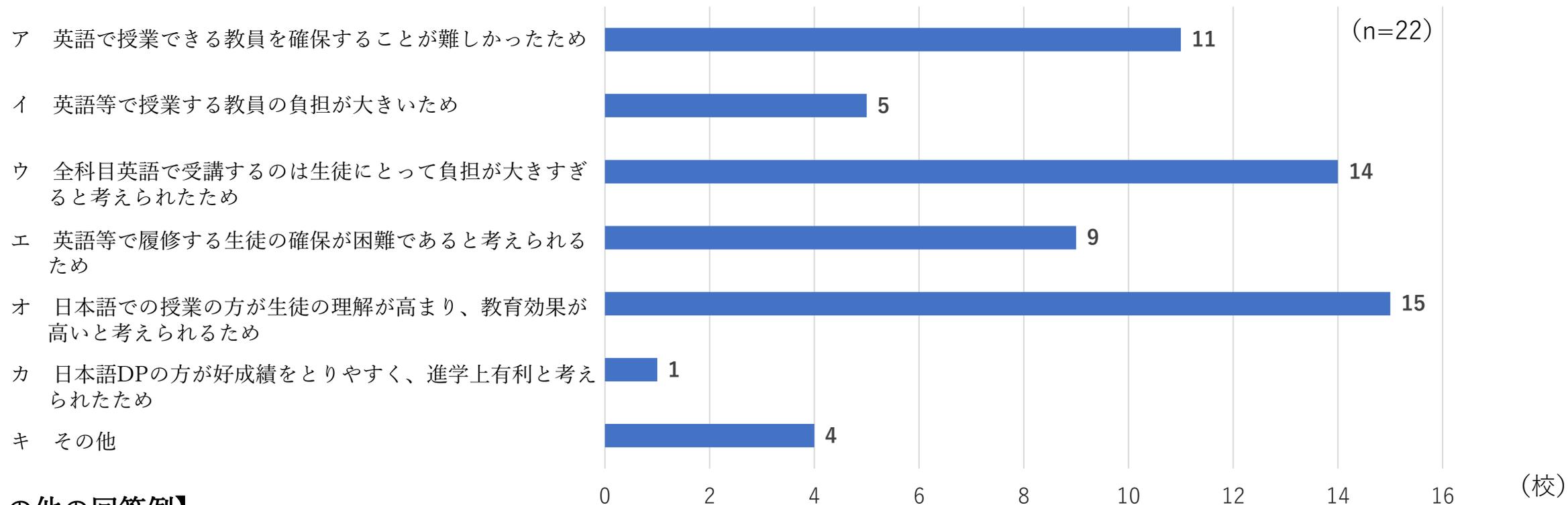


【回答の補足】

- (アの補足) 英語でのIBDP科目教鞭歴・IBDPコース資格保持し日本国外の教員免許状・資格保持者の日本の教職員免許状 [普通・特別] への申請に必要とされる基準や授与申請までにかかる時
- (エの補足) ESLのサポートクラスの設置
- 外国人教員の教員免許の確保が問題

生徒の負担及び、教員免許状のプロセスを含む教員の確保が主な課題となっている。

6-1. 日本語DPを実施している理由について【複数回答制】



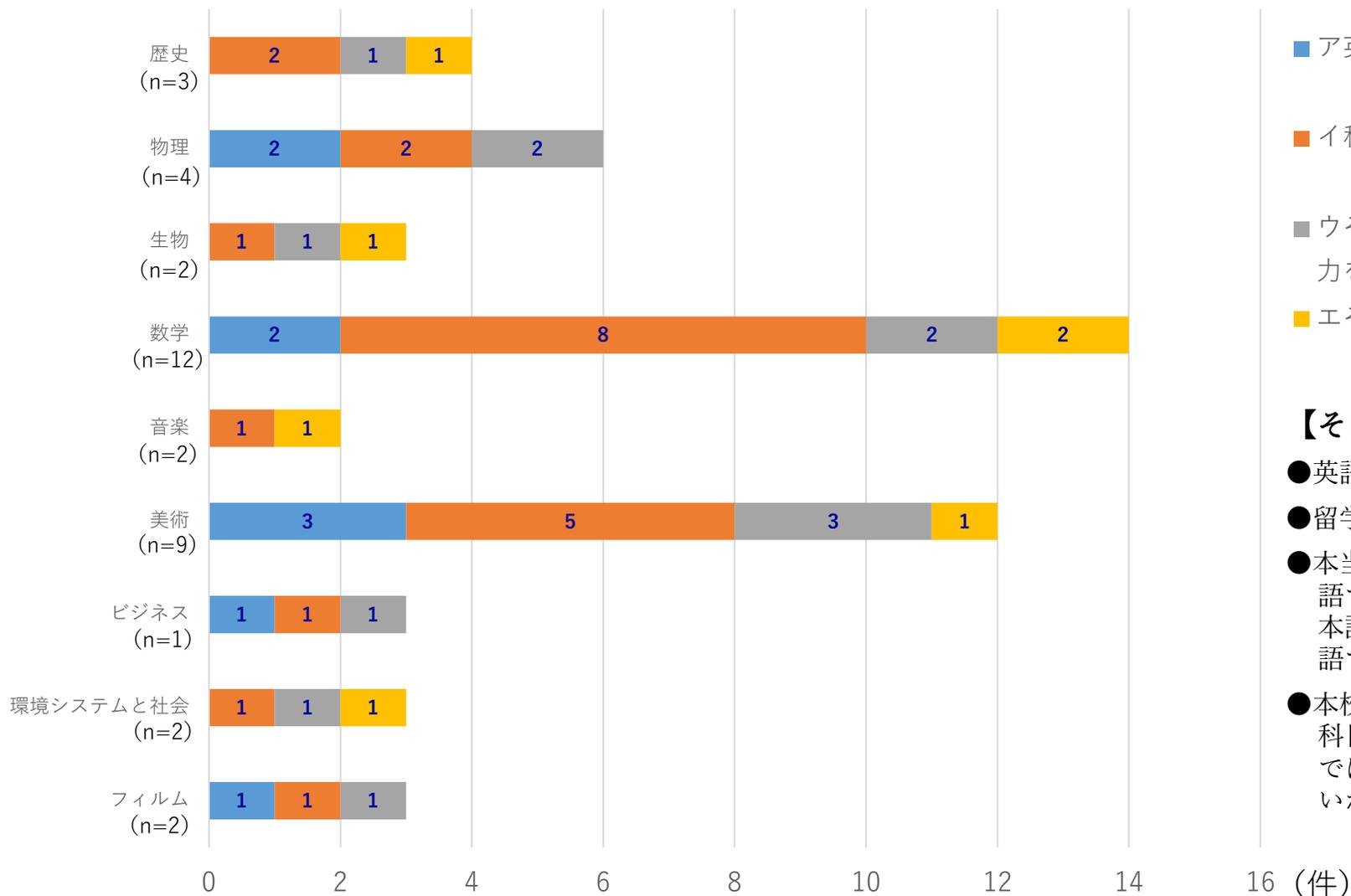
【その他の回答例】

- IBDPには現在日本が目指す教育改革のヒントが多く含まれているが、すべて英語で実施すると日本人教員のかかわりが希薄になり、日本人教員がIBDPの長所を身に着ける機会が少なくなるため。
- 学校の環境が日本語であるため、日本語ができない外国籍の方が雇用できない
- 公立校として、外国語のネイティブ教員に頼るのではなく、現職の日本人教員が授業を担当することが持続可能な組織として重要だと考えるため。
- 校長の決定による

日本語DPの実施理由として、過半数の学校が、教育効果の高さや生徒の負担軽減を理由として挙げていると同時に、英語で授業できる教員の確保が難しいことに起因すると回答した学校も半数に上る。

6-2. 英語で実施している科目とその理由について(科目別)【複数回答制】

※現高2生に開講している場合や今後開講する予定の科目についても回答を求めているため、2-1とは有効回答数が異なる。



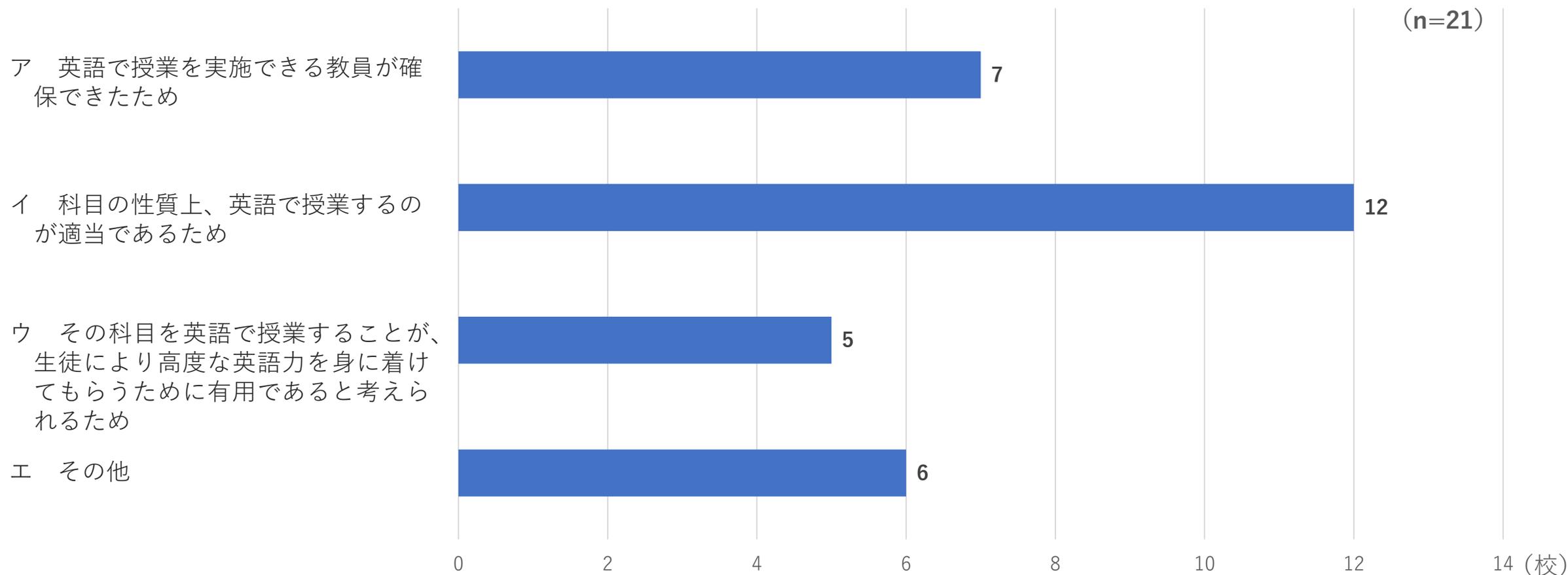
- ア英語で授業を実施できる教員が確保できたため
- イ科目の性質上、英語で授業するのが適当であるため
- ウその科目を英語で授業することが、生徒により高度な英語力を身に付けてもらうために有用であると考えられるため
- エその他

【その他の回答について】 *一部抜粋

- 英語で実施しても比較的、生徒が理解しやすいため（数学）。
- 留学生に対応するため（歴史、生物、音楽、美術）
- 本当は日本語で実施したいが日本語DPの制約上、二科目は英語で履修する必要がある。消去法で数学を選択している。日本語を母語としている生徒が本校の場合は大半で他科目を英語で行うよりは数学の方がよいと考えている。
- 本校がSSH指定校で科学に力点を置いており、科学に関連した科目を英語で実施することを検討した結果、チャレンジングではあるが、今までの取組みを生かすことができるのではないかと考えた（環境システムと社会）。

6-2. 英語で実施している科目とその理由について(全科目)【複数回答制】

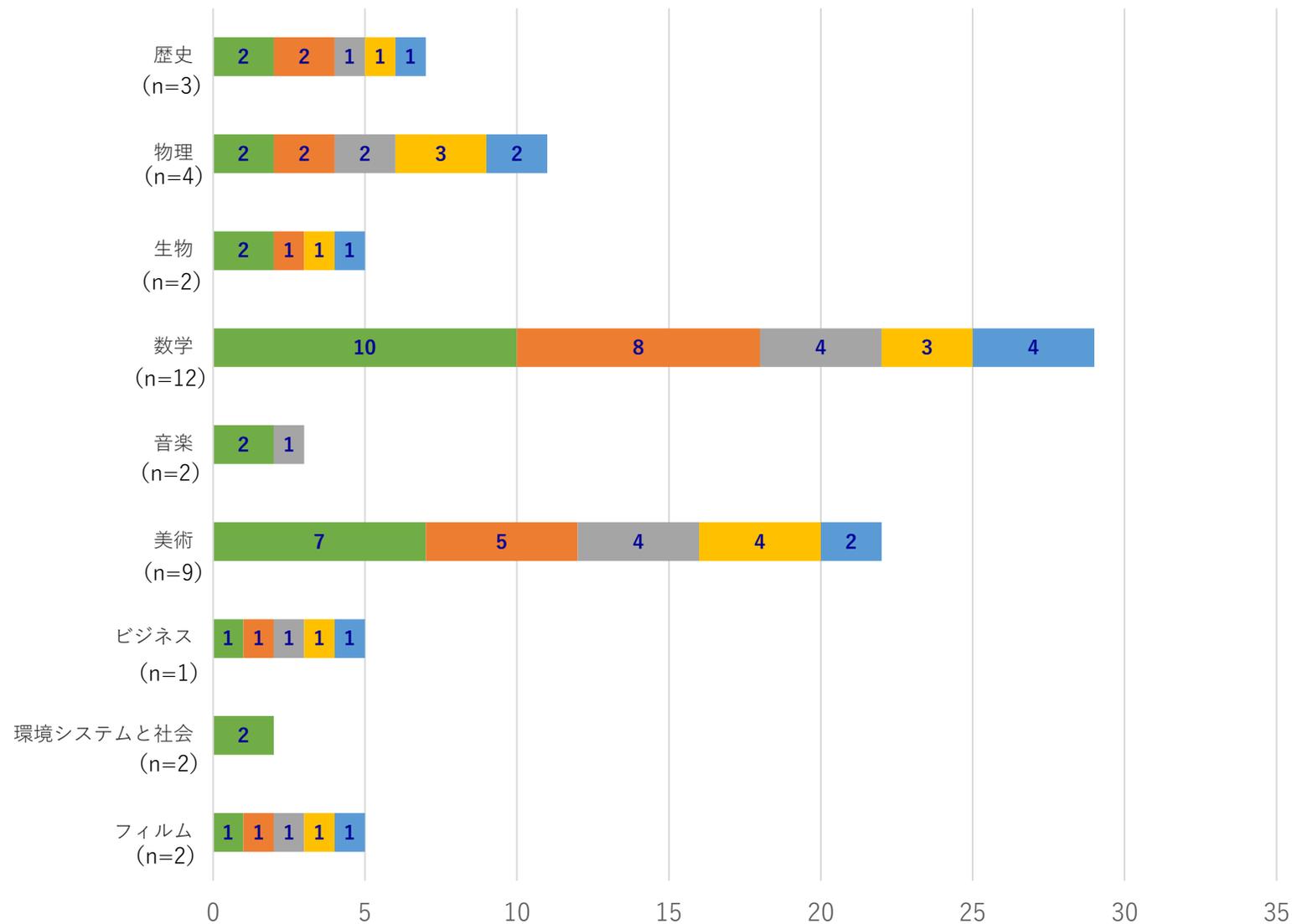
※1校が複数の科目について回答していることがあるため、前頁の項目別回答数の合計と本頁の回答数は一致しない。



英語で実施する科目の選択は、その科目の性質が最も大きな理由となっている

6-3. 英語での授業実施に関する課題について(科目別)【複数回答制】

※現高2生に開講している場合や今後開講する予定の科目についても回答を求めているため、2-1とは有効回答数が異なる。



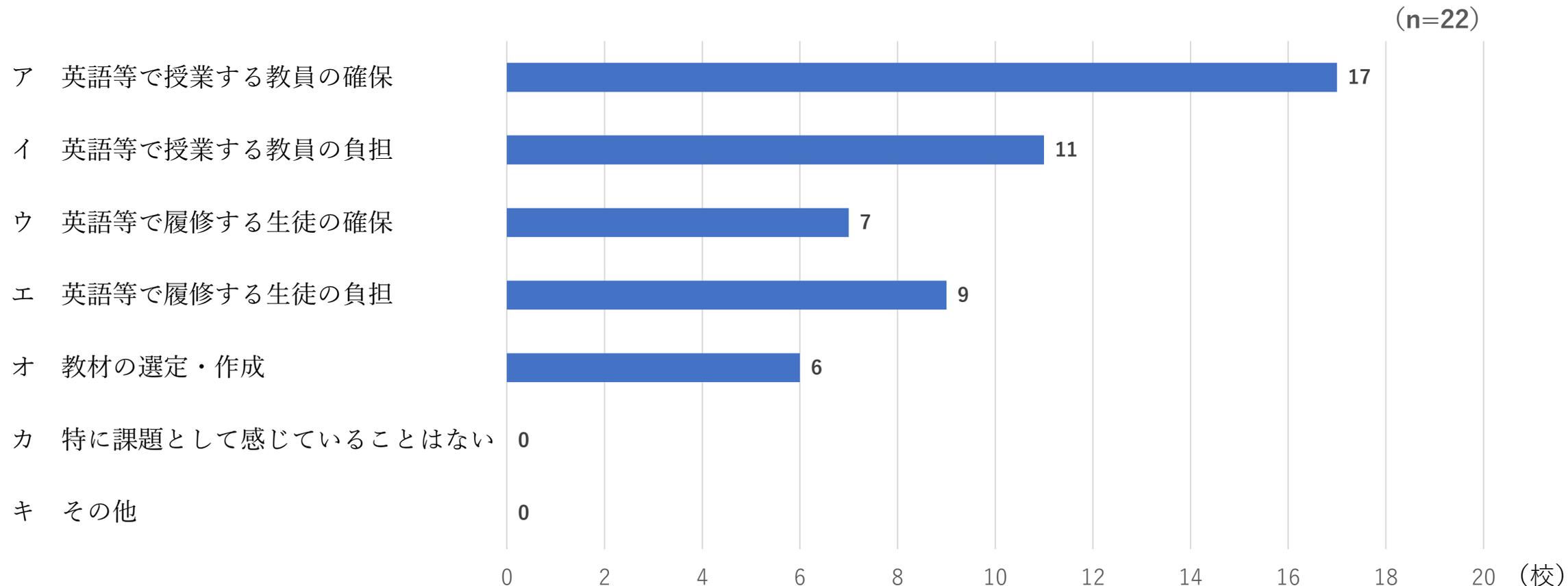
- ア英語等で授業する教員の確保
- イ英語等で授業する教員の負担
- ウ英語等で履修する生徒の確保
- エ英語等で履修する生徒の負担
- オ教材の選定・作成
- カ特に課題として感じていることはない
- キその他

【回答の補足】 *一部抜粋

- (アの補足) 現状Mathを英語で指導できる教員が1名しかいない。
- (ウの補足) 物理SL、音楽SL、美術SLを取っているのは生徒一人しかいない
- (エの補足) 日本人の生徒が、評価で求められる英語運用能力に達することが難しい。高2で履修するまでに英語教材が理解できるまで生徒の英語力を伸ばすこと。
- (オの補足) 日本語に訳されたものが少なく、DLDPの授業の準備が大変

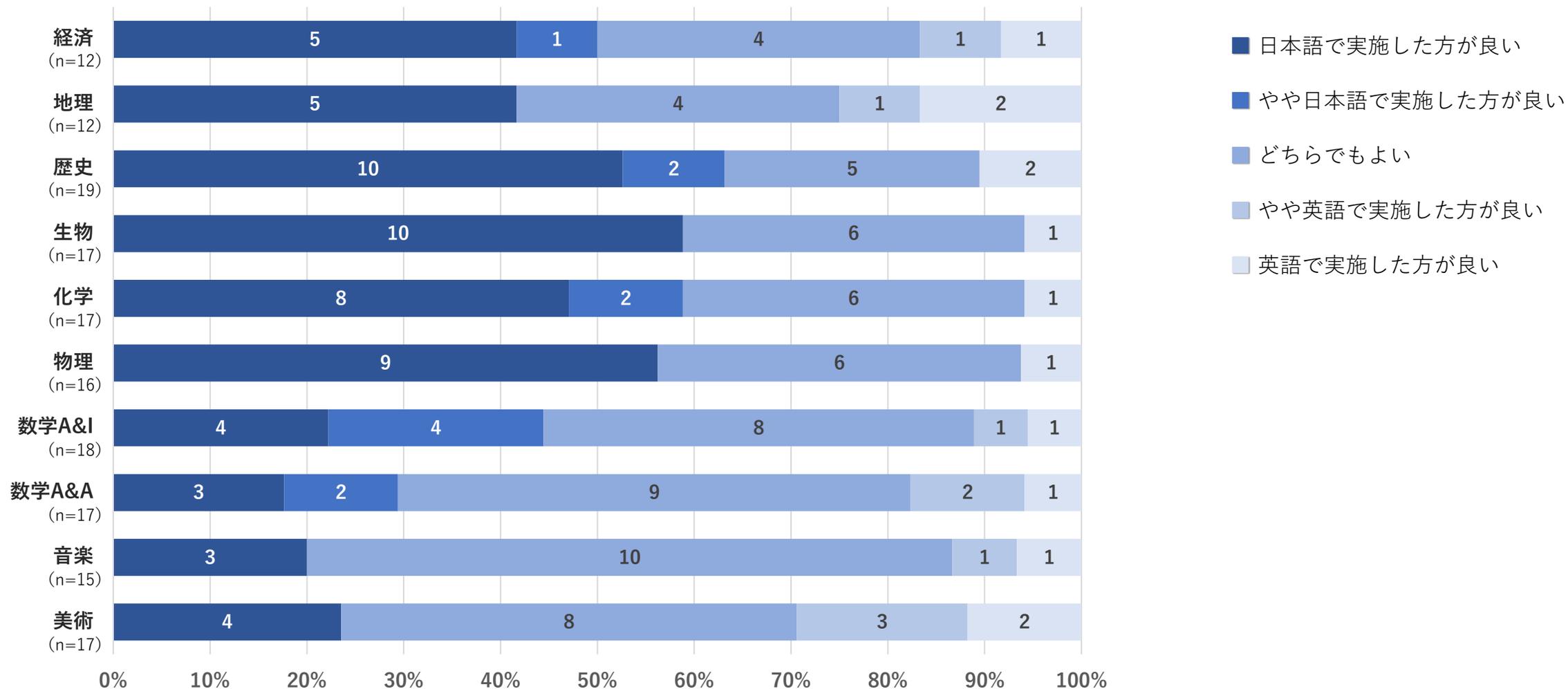
6-3. 英語での授業実施に関する課題について(全科目)【複数回答制】

※1校が複数の科目について回答していることがあるため、前頁の項目別回答数の合計と本頁の回答数は一致しない。



日本語DP校における英語での授業では、英語DP校に比して、生徒の負担よりも、教える側の組織体制や人事政策の観点の方がより大きな課題として捉えられている。

7. 各科目における望ましい学習言語について

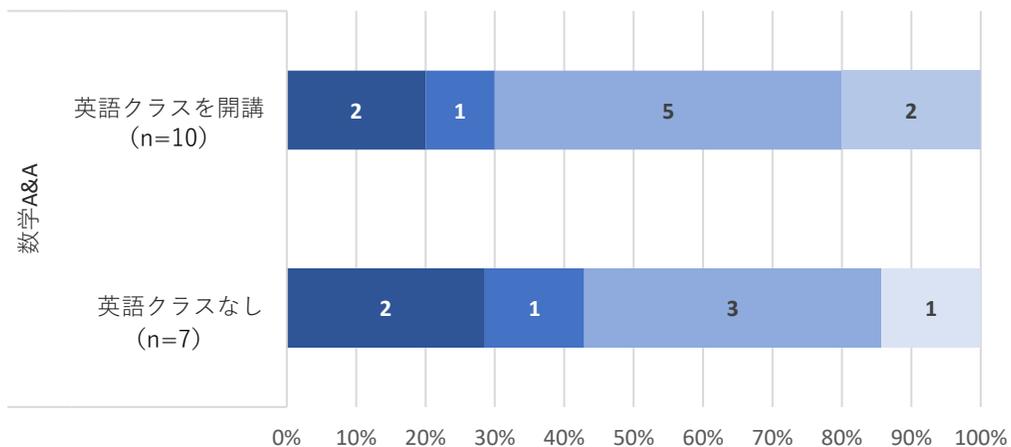
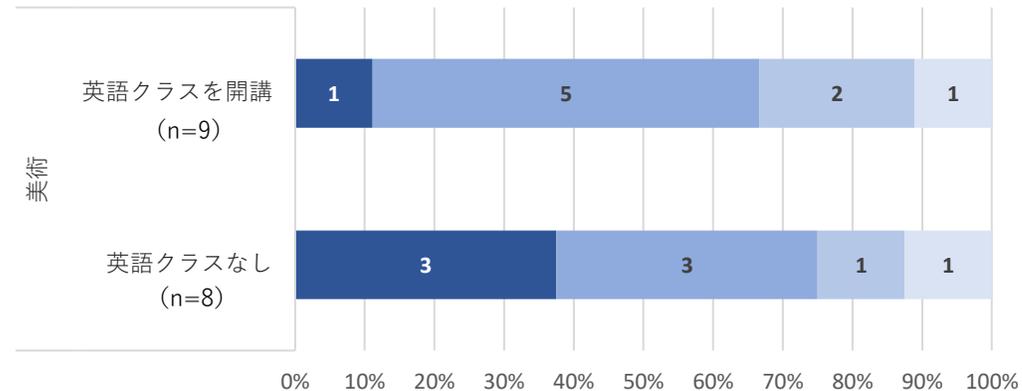
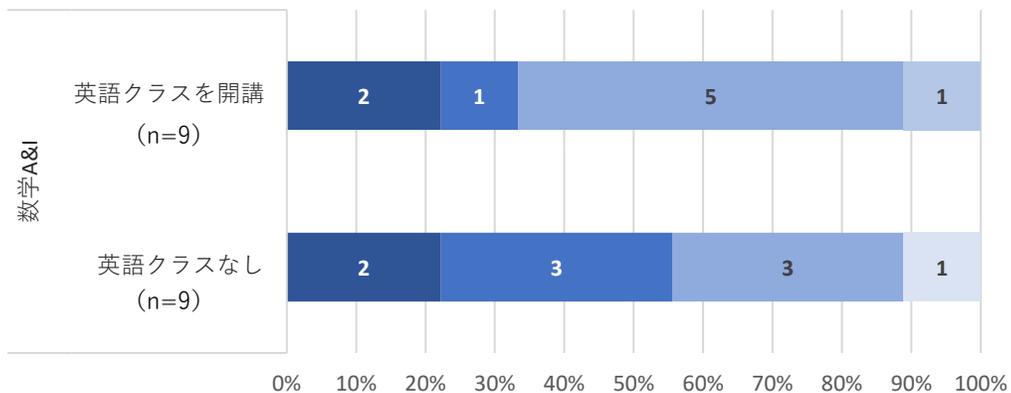


半数ほどの教科においては、日本語で実施することが適当であるとの意見の方が多いが、数学や芸術科目においては、どちらの言語でも実施してもよいとの意見が比較的多くなる。

日本語DP校のみ対象

(参考) 数学AI、数学AA、美術の望ましい学習言語（英語での授業実施経験別）

※音楽は、1校を除き英語クラスを開講していない学校からの回答だったので作成せず



- 日本語で実施した方が良い
- やや日本語で実施した方が良い
- どちらでもよい
- やや英語で実施した方が良い
- 英語で実施した方が良い

当該科目で英語クラスを開講している学校の方が、英語での教育効果を高く評価する傾向にある

7. 日本語DPを実施するうえで、英語で授業して良かった点、悪かった点(自由記述)

●良かった点：(抜粋)

【英語力の向上について】

- 英語と該当教科を同時に学ぶことができ、「英語で説明する力」が身に付いた。
- 英語を、言語習得が目的である授業以外の、オーセンティックな学びの場で活用できること。
- 英語運用能力が至便に身につく(英語の外部試験でも実証)
- 英語力アップをしようと生徒の意識が高まりました。英語が得意な生徒は3科目英語で受けています。
- 英語力の担保が図れるから

【海外進学について】

- 海外進学の選択肢が広がると同時に、大学進学後の学びにもつながる、という実感を生徒が持っている。
- 海外大学進学を目指す上でAcademic Englishが向上する。学習言語としての言語運用能力を2言語で高められる点

【その他】

- 日本の学校にIBDPを導入する上で4科目を日本語で日本人教員で指導できるということ。

●悪かった点：(抜粋)

【科目の特性について】

- art(グループ6)に英語力がないとよいスコアがとりづらい

【語学的な観点から】

- あえていうならば、「バイリンガル度」がやや低めになる。
- 評価は英語の母語話者と同じ水準で行われること。グループ2のEnglish Bよりも高い英語運用能力が求められ、高得点が望めないこと。

【生徒、教員への負荷について】

- 英語での授業を担当している教員の負担が大きい点。概念的理解が浅くなる。
- 言語の壁により能力を発揮できない生徒が出てくる。教員の獲得が難しい。教材が少ない。
- 高い英語力がDP選択の条件となるため、英語が苦手な生徒はDPを挑戦しなくなります。
- 生徒にとって専門用語の習得が難しく準備が大変である。また、ディスカッション等の活動が難しい。
- 生徒も教員も英語で英語以外の科目を教えることに苦労している。
- リサーチ、コメンタリー作成等に時間が掛かる点

7. 日本語DPを実施するうえで、気づきの点(自由記述)

●お気づきの点：(抜粋)

【指導言語について】

—IBでは、「グループ1, 2以外の科目で、1科目を英語での試験」としているだけで、「英語での授業」を指定している訳ではないと判断しています。日本語DPでは、英語力がままならない段階で、数学を英語で実施した場合、結局数学力も定着させにくいと聞いた事があります。ですので、「英語で授業をやる」ことに縛られないほうが良いかと思えます。

【教員の確保について】

—英語で実施する科目の担当者として外国籍のスタッフを雇わなくてはいけないこととなる可能性が非常に高くなります。
—多くの日本語DP校が数学を英語で教えることを検討している。それを教えられる教員は多くないため、人材争奪戦になることを強く危惧している。

【学習意欲について】

—長期的に見てメリットと考える生徒が多く、英語が好きな生徒は数学(本校で英語で実施しているG1,2以外の科目)に対してもモチベーションを持つようになってきた。発表等の活動も慣れてくればできるようになる。

【全科目の日本語実施について】

—日本語での授業においても英語のテキストを使用できているのは、2言語で実施しているため。もし全DP科目が日本語のみになったら、各科目で英語で書かれたテキストを使うことへの抵抗感が大きくなる可能性がある。

8. その他、日本語DPに関する意見(自由記述)

【「日本語DP」という表現について】

—「日本語DP」という呼称は「日本語のみでDPを実施する」と中学生・保護者が誤解する恐れがあるため、「DLDP」（両方の言語で実施する）という、IBと同じ呼称を使用しております。ご検討いただけると幸いです。

【教員の確保について】

—English B以外を指導できるEnglish Speaking Teacherの確保はやはり難しいです。文科省にはそのサポートシステムの構築をお願いしたい。また人材開発と、学内IB教育理解を推進するため、公式ワークショップの無料化を再度実現していただきたい。

【教材について】

—日本語の教材がまだまだ限られていたり、IB機構とのやり取りなども英語であったり、日本人の英語教師が他教科の教師のために翻訳を行うことが多々あり、負担が増えていること。

—英語力の高くない日本人教員が指導しやすいように指導環境や教材にサポートがもっとほしい。

—日本語DPの資料、情報が少ないため、参考にできるものがあると大変ありがたいです。

【大学進学について】

—IB入試を導入する国内の大学がさらに増えることを希望します。また、大学が設定する条件や点数が高い大学がありますが、それにより進学先を海外の大学に変えるDP生がたくさんいるようです。国内の大学には、よりDPに開かれたIB入試を検討し、多くの才能ある学生を受け入れて欲しいと思います。

【日本語・英語によるDPについて】

—切実な要望として、二科目を英語で履修しなくてはならないという決まりを一科目にしてほしい。それが日本でIBを普及させるために不可欠だと考える。

—日本語でも英語でも、忙しい教育内容であるので言語によるちがいはない。

—日本語で履修し、思考力育成型の教育を受けるチャンスができたことはありがたい。